

あたらしい憲法のはなし 付載七篇

Leaflet- v.2

本書は現憲法施行後間もなくに初刊された。

著者は、終戦の時をはさんで25年間、日本憲法学界の頂点にあったひと。「新憲法はできた。りっぱな民主主義の憲法である」(あとがき)と讃える一方、新憲法の文章がひらがなまじりの口語体であることを、
ことのほかよろこんだひとでもあった。

「私はこの本で、新憲法に何が書いてあるかを、
できるだけ誰にもわかるように書こう」(はしがき)と、
たとえば、「民主政治」(民主主義)に触れて、こう言う。

「新憲法のいちばんだいじな精神というのは、民主政治ということである。
つまり、国民のひとりひとりが、民主政治ということをよく理解することが、
新憲法を死んだ憲法にしてしまわないために、
何にもまさって必要なのである」。

「民主政治は自由の政治である。国民はそこで……かずかずの自由をもっている。

しかし、自由とは自分の好き勝手にするということではない。

自分が自由であると同時に、他人もまた自分と同じように自由である。

……自分の自由を主張することだけ知って、

他人の自由を尊重することを知らない者は、民主政治のいちばんの敵である」。

その「民主政治」にはしかし、難点がある。

このことに関する著者の論考も、本書に収載した。

「付載七篇」中「憲法改正と民主政治(抄)」の

「第六 民主政治に内在する弊害とその対策」(p. 274)であり、

「多数党の横暴」、「衆愚政治」など弊害6項目を挙げ、論究している。

「付載」はこのように、「少年少女」以上を読者対象とする本文を補足している。

本書は、しっかり憲法を知りたいという思いに応える内容になっています。

憲法を真っ当に、かつ明快に理解し、それをベースに、
政治のありようを見つめ、ときとして声をあげるうえで、
繰返し読むに値する、今最も頼りになる本です。